

言語サービス基盤を活用した多言語支援システム

京都大学提供
作成日 2016年2月24日
更新日



研究者氏名
いしだ とおる
石田 亨

所属機関
京都大学
情報学研究科

関連キーワード(複数可)
サービスコンピューティング、異文化コラボレーション、言語サービス基盤、多言語支援システム

主な研究テーマ
・言語サービス基盤の拡大とそれを活用した異文化コラボレーション活動における多言語支援

主な採択課題
・基盤研究(S)平成24～28年度(配分総額:217,880千円)
課題名「マルチエージェントモデルに基づく持続可能な言語サービス基盤の世界展開」

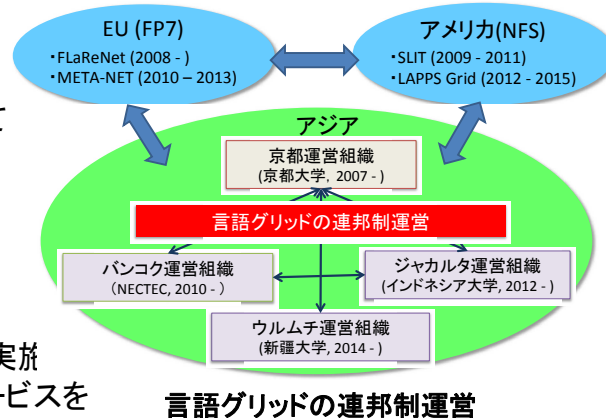
① 科研費による研究成果

・世界中の言語処理技術(言語サービス)をインターネット経由で組み合わせて利用する言語グリッドを提唱。

・アジアや欧米の大学・研究機関と連携し、協力して言語サービスの集積・提供を行う連邦制運営を実施。その結果、245の言語サービスを集めている。

・言語資源(言語サービス開発の元となるデータ)が少ない低資源言語の対訳辞書を生成する技術やインターネット上のサービスを効率的に並列実行する手法を提案。新疆大学と協力してウイグル語やカザフ語に適用し、生成された対訳辞書を言語グリッドで公開。

・ACMやIEEEといったトップレベルの学会での発表や国際会議の開催を行い、世界の異文化コラボレーションや言語サービス基盤の研究をリードしている。



② 当初予想していなかった意外な展開

・言語グリッドを活用した応用システムとして、講演や会議の多言語支援システムを開発。

・ワイズメンズクラブアジア地域大会 (<http://aac2015.jp/jp/>, 2015/7/31～2015/8/2, ウェスティン都ホテル京都, 3カ国語, 約1000名), および KISSY (<http://www.pangaeaan.org/event/kissy2015/>, 2015/7/31～2015/8/7, 京都大学時計台記念館, 5カ国語, 児童28名)において活用され、これらの様子取材した記事が2015/8/22の京都新聞に掲載された。



③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・多言語支援システムは、国際会議などの多言語支援に活用するとともに、大学研究室での研究会における利用に向けて無償公開する。

・言語グリッドの拡大と多言語支援システムの普及により、言語の壁を越えて、誰でも国際交流や異文化コラボレーションに参加できる社会の実現に貢献していく。